

植田邦彦\*: チュンベリーが記載したモクレン属  
植物の命名上の問題点

Kunihiko UEDA\*: Typification of *Magnolia*  
species published by Thunberg

原 (1986) は *Magnolia obovata* Thunb., *M. tomentosa* Thunb. のタイプ選定について論じ, Ueda (1986a, 1986b) の論文も引用した。議論がすれ違いになっている点もあるので, ここで私の見解を補足しておきたい。

花木として広く栽培されるモクレン属植物の学名はごく最近に至るまでたびたび変更されたものがあるので, Ueda (1985, 1986a, b) はそれらの正名の検討を行った。Ueda (1985) には日本語の解説も付けた。原先生はその和文摘要について“シモクレン, ハクモクレン, コブシ等については君の言う通りだが, ツェンベリーに関わるシデコブシとホオノキについては賛成出来ない。ツェンベリーの学名は著作を全体的に考えねば正しく判断出来ない。”と言われたことがある。“それならば是非 ツェンベリーをまとめて解説してほしい”とお願いしたが, それが原 (1986) の書かれる動機の一つであったことは序文にあるとおりである。私が見せていただいた原先生の初期の草稿と印刷されたものとを比較してみると, *Magnolia* についての議論は私の和文摘要に基づいたままのうえ, Ueda (1986a, b) については十分には読まれずに急遽論議を付け加えて投稿してしまわれたと思われる。原先生の当時の状態では止むを得なかったとはいえ残念なことである。そのため, 本稿のような補足がどうしても必要である。

原 (1986) には誤植がある。*Magnolia* の項目で問題となる部分については指摘したい。(葉なし) [p. 359, l. 16]→(標本には葉がある)。ケンフェル [p. 359, l. 25]→ツェンベリー (ケンフェルでは事実と反する。初期の草稿ではほぼ同内容のところがツェンベリーとなっている)。新種 [p. 359, l. 28]→前種 (新種では意味が通らない。草稿では前種)。最後 [p. 359, l. 28]→最初 (草稿では最初, Thunberg の原文でもそうである)。

ホオノキ 原 (1986) は“ツェンベリーの学名については広く一般的な見解がのべられたことはない”と述べている一方, たびたび“…のタイプの選定については…の見解が広く受け入れられている”または“…と解釈するのが慣習である”という表現をしている。しかし原の挙げたこれらの事例はすべて, 一度決定されたレクトタイプは国際命

\* 591 堺市百舌鳥梅町 4-804, 大阪府立大学 総合科学部, College of Integrated Arts and Sciences, University of Osaka Prefecture, Sakai, Osaka 591.

名規約上誤りの無い限り変更してはならないという規定に従って用いられているのであって、その選定にあたったときの解釈が一般的だとは直ちには言えない。例えばトウガン等のレクトタイプが選定されたときに和名が重視されなかったからといって、それは個別の事情であり、事情の違う他の種にそのことを機械的にあてはめることは出来ない。ましてサカキに対する *Cleyera* は国際命名規約により保留名とされたのだから今や議論の余地はない。しかも、Thunberg が Kaempfer (1712) を引用している場合には、単に和名を名称として参考までに引用しただけの場合のほかに、シノニムとして内容までも引用している例もある。*Magnolia* の場合は後者である。

Thunberg の日本植物の研究をたどってみる。Thunberg (1780, 1784a<sup>1)</sup>) は先ず Kaempfer (1712) の記載した種類を Linné の分類系に従って同定し、一部は新種として記載した。そのために Thunberg は帰国途上 Kaempfer の遺品 (標本と後にバンクスによって出版された図版) を検討した (Ueda 1986a)。更に Thunberg (1780, 1784a) を基に自分の標本をも研究して纏めたのが “Flora Japonica” (Thunberg 1784b) で、その後一部の修正について発表した (Thunberg 1794b)。したがって Thunberg のタイプの選定にあたっては Kaempfer に重みを与えるべきであろう。

Thunberg の代表的著作である Flora Japonica はどういう性格のものであったかの判断が Thunberg の学名を考える際重要である。原 (1986, p. 354) は Stearn の意見を尊重し、Thunberg の Flora Japonica に登載された植物は、新種以外の部分についてはほとんど全てを Linné の later homonym と考え、例えば *Magnolia glauca* sensu Thunb. non L. といった扱いをしている (Hara 1977)。Thunberg の記載は日本産の植物にのみ基づいているのだからリンネとは内容が異なり、誤同定として取り扱うべきだと考えるからである。確かに Linné の高弟であった Thunberg は世界中の植物に Linné の名前を当てはめようとし、Kaempfer (1712) に対しても同様の姿勢を通そうとしたことはよく知られている。しかし、*M. glauca* については Thunberg (1784b) はリンネの種概念を拡張し、日本産植物も同種として Kaempfer と自分の採集品に基づいて記載したとみなす方がよい (Ueda 1986a)。なぜなら日本産のものは *M. glauca* var. *glauca* としてではなく、var. “ $\alpha$ ”, “ $\beta$ ” のもとに分けて記載しているからである (図 1)。そしてその “ $\alpha$ ”, “ $\beta$ ” を10年後に種に格上げしたのが *Magnolia tomentosa* と *M. obovata* とである。したがって *Magnolia tomentosa* と *M. obovata* の命名上の出発点は無論 Thunberg (1794b) であるが、そこで発表された種の概念は Thunberg (1784b) の *M. glauca* “ $\alpha$ ”, “ $\beta$ ” の内容に遡れ、さらに Thunberg (1784a) まだたどることができ、内容的には Kaempfer (1712) が出発点である。Thunberg (1784a) は Sini Kaempf. を *M. glauca* “ $\alpha$ ”, Mokkwuren Kaempf. を *M. glauca*

1) 原 (1977, 1986) は 1783 としているが、Stafleu & Cowan (1979) に従う (Ueda 1986a 参照)。

“ $\beta$ ”と名付けた。これはそのまま Thunberg (1784b) にも踏襲されたが、開花期や花色などについても言及され、Thunberg 自身の標本も記載のもとになっている (Ueda 1986a, 原 1986)。この過程を無視してレクトタイプを選定してはならない。国際命名規約でも、レクトタイプを選定は機械的に行ってではなく、その分類群についての分類学的な研究成果とその記載の基になったプロトログを深く研究してから選定すべきだとしている。

なお、原 (p. 359) は Ueda (1986a) について“植田君は  $\alpha$ ,  $\beta$  を正式の発表としているが、変種名はなく問題にならない”としているが、私は上述のようにプロトログとして重視すべきことを述べたにすぎない。いうまでもなく Ueda (1986a) でも明記したように、*M. glauca*  $\alpha$ ,  $\beta$  は学名ではない。

また議論の中で原 (p. 359 および p. 360) は“植田君は、ツェンベリーは *Magnolia* において特に花色を重視して分類したとしている”と述べているが、私の論議 (Ueda 1985, 1986a, b) でそのようなことは述べておらず、これは何らかの誤解にもとづいている。むしろ Thunberg は1分類群中に花色の違うものをしばしば同居させていることから、花色はあまり重視していなかったと思う (原のトウガンの例参照)。Kaempfer は木蘭 *Mokkwuren* (シモクレン) と *Mokkwuren flore albo* (漢字名なし; ハクモクレン) の2種類を記述している。Thunberg (1784a, b, 1794b) は後者を前者の単なる白花品とみなしていたのか、Kaempfer (1712) の全種類に言及している Thunberg (1780, 1784a) において *Mokkwuren flore albo* は同定していない。Thunberg (1784a, b, 1794b) の引用している *Mokkwuren* Kaempf. は両者を合わせた概念であると考えられる。

原 (1986) は“ツェンベリーは和名の収集に努力したが、それをシノニムとしてではなく、‘Japonice’のもとに単に和名として引用し、和名はケンフェルによった場合もある”と述べているが、*M. glauca* については正確ではない。Thunberg (1784b) は Kaempfer による和名と自分で収集した和名を‘Japonice’のもとに引用し、さらにそれとは別に Kaempfer (1712) をシノニムとして再び引用している (図1)。和名の出典としてだけでなくシノニムとしても引用したからこそ同じ和名を重複してまでも引用したのであろう。*M. obovata* と *M. tomentosa* の原記載文での Kaempfer の引用の仕方 (原 1986, 図1) と比較されたい。このように Thunberg (1784b) の *M. glauca* の記載は複雑な内容から構成されており、それに基づく *M. obovata* の記載文が標本と表面的に一致するからといって単純にその標本をタイプとするわけにはいかない。たとえ原のいうようにタイプがホオノキの標本であったとしても下記のような問題があり、*M. obovata* は非法名である。

Dandy (1973) は、*Magnolia obovata* Thunb. は、Kaempfer (1971) の図版 t. 43 と t. 44 とを引用して記載されているので *superfluous name* となり、合法名ではな

## MAGNOLIA.

*glauc.* *M. foliis ovato-oblongis subtus glaucis.*

*Magnolia glauca.* Linn. *sp. Pl.* p. 755.

*Duplex* occurrit varietas, scilicet:

*α)* flore albo.

*β)* flore magno, atropurpureo.

*Japonice:* *α)* Sini et Konfusi, vulgo Kobus, aliis Side Kobuli et Mitsmata

*Sini* et Konfuli, vulgo Kobus, aliis Side Kobuli. Kaempf. *Am. exot. Fasc. V.* p. 845.

*β)* Mokwuren et Fo no Ki.

*Mokwuren.* Kaempf. *Am. exot. Fasc. V.* p. 845.

*Crescit* in insula Nipon, in regionibus Arai, saepe in hortis et ollis culta, ob elegantiam florum speciosum.

*Floret* Martio, Aprili.

*Folia* adulta valde grandia evadunt, obovato-oblonga; subtus glauca, reticulata et villosa.

図 1. Thunberg (1784b) “Flora Japonica” における *Magnolia glauca* L. の記述.

いとした。なぜなら, t. 43 (Mokkwuren flore albo Kaempf.) は *M. denudata* Desr. ハクモクレン, t. 44 (Mokkwuren Kaempf.) は *M. liliiflora* Desr. シモクレンのそれぞれホロタイプだからである。原は Dandy を“曲解も甚しい”と批判したが、私は Dandy の見解に賛成である。詳しく述べてきたように, *M. glauca* “β” およびそれに基づく *M. obovata* の種概念にはシモクレン, ハクモクレン, ホオノキが含まれている。したがって, Thunberg (1784b) が Kaempfer の t. 43, 44 について内容とは無関係にそこに添えられた和名のみで引用したとはとても考えられない。もし和名のみを引用したのなら, Thunberg はハクモクレン, シモクレンの図から別種と考えている *M. obovata* の和名を引用したことになる。Thunberg はシモクレン, ハクモクレンを同一種とみなし, ホオノキの葉をその葉と考えていたと解釈するしかない(ハクモクレンは常に, シモクレンは時に, 開花時には葉は展開していない)。したがって, 無理な理由をつけてまで *M. obovata* を生かすより, Dandy のようにこの名前は superfluous name とするほうが合理的である。

したがってホオノキの正名は *Magnolia hypoleuca* Sieb. et Zucc. である (Ueda, 1986a)。なお, 単純に読めば *M. obovata* の内容はシモクレンを指しているように感

じられるので、100年以上にわたって *M. obovata* はシメクレンの学名として採用されていた。その当時ホオノキの学名は *M. hypoleuca* であった (Ueda 1986a)。

シデコブシ *Magnolia tomentosa* も *M. obovata* 同様 Kaempfer (1712) が種概念の根底にあると思われる。

Thunberg の標本をみるとシデコブシの花の標本以外に *M. tomentosa* の記載に表面的には合うミツマタの標本がある。しかし Ueda (1986b) で詳述したように、後者を *M. tomentosa* のタイプとすることはできない。*M. tomentosa* Thunb. (1794b)<sup>2)</sup> の記載と同年に Thunberg (1794a)<sup>2)</sup> において Thunberg 自身がシデコブシの標本の方に *M. tomentosa* の名を当てたことを表明し、標本にもそう記入しているからで、Thunberg の取扱いはその後も一貫していた (Ueda 1986b)。このことについて原はハリギリの例を引用して *M. tomentosa* の場合も同様にみなしミツマタの方をタイプとしているが、ハリギリの場合はそのようにレクトタイプが指定されたということにすぎず、それを定説のように考えて状況の違う *M. tomentosa* に機械的に適用するのは正しくない。

問題のミツマタであるが、Thunberg (1784b) は “*M. glauca* α”, *M. tomentosa* の和名として自ら収集した Mitsmata を引用している。しかし、Thunberg (1784b) は著作末尾の不明植物の項目に Mitsmata を入っていて彼が和名としても実体としても Mitsmata を疑問視していたことを示している (Ueda 1986b)。*M. obovata* の場合と同様、シデコブシは開花期には葉がなく、ミツマタの葉の付いた標本をシデコブシの葉の時期の標本と、疑いつつ、みなしたものだろう。この解釈は Thunberg (1805) の *M. tomentosa* の図版からも支持される。Thunberg はシデコブシの標本をそのまま写して図版とし、それにミツマタの標本から葉だけを借用して合成した図を發表しているからである。したがって Thunberg (1794a) 等から判断して2枚の original materials (シンタイプは原記載に引用されているものに限られる) の内から Thunberg 自身によってシデコブシの標本がレクトタイプに指定されたと考えねばならない。したがってシデコブシの正名は *Magnolia tomentosa* Thunb. である (Ueda 1986b)。なお、Sini Kaempf. の記載内容のほとんどはコブシについてのものであり、Thunberg もそれを踏襲しているが、Thunberg の標本はシデコブシである。現在ですら時にシデコブシはコブシと同種とされており (Ueda 1988), 当時コブシの種概念中にシデコブシが含まれていたとしても不思議ではない。

原 (p. 362) は議論の中で Ueda (1986b) について “植田君は、ツェンベリーはモク

2) Ueda (1986a, b) で前者を Thunberg (1794a), 後者を Thunberg (1794b) としたのは誤りであった。Stafleu & Cowan (1987) によれば前者は5月1日, 後者は4月19日の出版である。*M. tomentosa* Thunb. の記載より早くシデコブシの標本に *M. tomentosa* と命名していることを公表していたことになる。

レン属の種を記載しようとしたのだから *M. tomentosa* をミツマタには使用できないというが、現行規約では論外で納得できない。分類学上の見解と命名上の問題とは無関係である”と批判している。私は分類学上の見解と命名上の問題を混乱させていることはなく、原が“植田の見解”として引用した文章は、Rehder の見解を *M. tomentosa* の解釈史の一つとして引用した部分である。

なお、*M. tomentosa* は合法名であるにもかかわらずミツマタにもシデコブシにもコブシにも採用されてこなかった (Ueda 1986a, b)。この理由を原 (p. 362) は当時の国際規約では“discordant element の混合”によってその学名を廃棄できたからと推定しているが、中井は *Edgeworthia tomentosa* (Thunb.) Nakai (1919) を発表している。もっともこの学名は中井自身も含めてその後採用した人はなく (濱谷, 私信), 原 (1986) が唯一の採用者である。

オオヤマレンゲ Thunberg とは関係がないが、原は Ueda (1986a) について“オオヤマレンゲの学名 *Magnolia sieboldii* K. Koch は Ueda (1980) が近年気付いたように記しているが、45 年も前から原 (1940) が指摘採用している” (p. 363) と言及しているので、これにも触れておく。

日本で栽培されている朝鮮半島原産のオオバオオヤマレンゲは最初 1845 年に、*Magnolia parviflora* Sieb. & Zucc. と命名されたが、この名前は *M. parviflora* Bl. (1825) の later homonym である。1853 年には K. Koch<sup>3)</sup> が *M. sieboldii* K. Koch<sup>3)</sup> nom. nov. を提唱したが、長らく採用されなかった。*M. sieboldii* に言及したのは 1929 年、Index Kewensis: Supplement for 1921-1925 がおそらく最初である。翌 1930 年には国際命名規約が改正され later homonym は退けられることになり、1936 年にすでに Dandy は *M. sieboldii* を正名として採用している。一方日本では 1926 年、Koidzumi が *M. verecunda* Koidz. nom. nov. を発表した。それに反論して Nakai は 1933 年に“*Magnolia parviflora* Bl. はトウオガタマ (*Michelia figo*) のシノニムに過ぎないので、国際命名規約からみて *Magnolia parviflora* Sieb. & Zucc. を採用しても問題はない”と主張したが、国際命名規約は 1930 年に変更されている。原は 1940 年に *M. sieboldii* が正名であることを日本では最初に紹介した。戦後は、国の内外を問わず一般にこの学名が採用されている。

ただ、日本産のオオヤマレンゲは大陸産のオオバオオヤマレンゲとは異なる分類群であることが明らかになったので (Ueda 1980), 前者には *M. sieboldii* ssp. *japonica* Ueda が、後者には *M. sieboldii* ssp. *sieboldii* が使われることになる。Ueda (1986a)

3) Hortus Dendrologicus の著者名はラテン語風に Carulos Koch となっており、学名命名者としても自ら C. Koch と記しているので Ueda (1980) はこれを採用した。Stafleu & Cowan (1979) は本名である K. Koch を採用しているので、これに従う。

では学名変遷史のなかでこのことに触れたに過ぎない。

最近モクレン属植物の園芸関係者が主な会員である American Magnolia Society の機関誌において、Ueda (1985, 1986a, 1986b) の見解が詳しく紹介された (Harvey 1987)。園芸植物の学名は分類学者自身よりもむしろ農学、園芸学等において使用される頻度が高いことを考えると、今回のような花木の学名の大巾な変更が受け入れられるなら歓迎されるべきことである。

なお Stafleu & Cowan (1981) は Murray (1784 May-June) が記載した日本植物の学名は Thunberg (1784 Oct.) の Flora Japonica に対して priority を持つとした。Kew Index for 1986 ではそれに従い Thunb. ex Murray を大量に採用している (矢原, 私信)。幸いここで取り上げたモクレン属はこの問題に関係しないが、日本の植物の学名の命名者がかなり変わることは避けられないし、一部タイプの変更を伴う可能性もある。

原稿に目を通され多くの御助言を賜った岩槻邦男教授、ミツマタにつき御教示下された濱谷稔夫教授ならびに Murray について注意を喚起して下さった 矢原徹一博士に感謝致します。

#### 引用文献

- Dandy, J.E. 1936. *Magnolia globosa*. Curt. Bot. Mag. 159: sub t. 9467.  
——— 1973. *Magnolia hypoleuca*. Bailey 19: 44. 原 寛 1940. *Magnolia sieboldii* K. Koch. Journ. Jap. Bot. 16: 255. Hara, H. 1977. Nomenclatural notes on some Asiatic plants, with special reference to Kaempfer's Amoenitatum Exoticarum. Taxon 26: 584-587. 原 寛 1986. ユンベリーが命名した日本植物の基準選定について. 植物研究雑誌 61: 353-363. Harvey, M.J. 1987. Nomenclatural changes in *Magnolia*. Magnolia 22: 5-8. Kämpfer, E. 1712. Amoenitatum Exoticarum Politico-physico-medicae Fasciculi V. ——— 1791. Icones Selectae Plantarum (Published by J. Banks). Koch, K.H.E. 1853. Hortus Dendrologicus. Koidzumi, G. 1926. *Magnolia verecunda*. Bot. Mag. (Tokyo) 40: 339. Murray, J.A. 1784. Systema Vegetabilium ed. 14. Nakai, T. 1933. *Magnolia parviflora* Siebold & Zuccarini. Flora Sylvatica Koreana 20: 118. Stafleu, F.A. & R.S. Cowan. 1979. Taxonomic Literature, vol. 2. 2nd ed. ——— & ——— 1981. ibid. vol. 3. 2nd ed. ——— & ——— 1987. ibid. vol. 6. 2nd ed. Thunberg, C.P. 1780. Kaempferus Illustratus I. Nova Acta Soc. Sci. Upsal. 3: 196-209. ——— 1784a. ibid. II. Nova Acta Soc. Sci. Upsal. 4: 31-40. ——— 1784b. Flora Japonica. ——— 1794a.

Museum Naturalium Academiae Upsaliensis vol. 16. ——— 1794b. Botanical observations on the flora Japonica. Trans. Linn. Soc. 2: 326-342. ——— 1805. Icones Plantarum Japonicarum, vol. 5. Ueda, K. 1980. Taxonomic study of *Magnolia sieboldii* C. Koch. Acta Phytotax. Geobot. 31: 117-125. ——— 1985. A nomenclatural revision of the Japanese *Magnolia* species (Magnoliac.), together with two long-cultivated Chinese species III. *M. heptapeta* and *M. quinquepeta*. Acta Phytotax. Geobot. 36: 149-161. ——— 1986a. ibid. I. *M. hypoleuca*. Taxon 35: 340-344. ——— 1986b. ibid. II. *M. tomentosa* and *M. praecocissima*. Taxon 35: 344-347. ——— 1988. Star Magnolia (*Magnolia tomentosa*)—an indigenous Japanese plant. Journ. Arnold Arbor. 69: 281-288.

### Summary

Hara (1986) had different ideas on Ueda (1986a, 1986b) regarding the typification of *Magnolia obovata* Thunb. and *M. tomentosa* Thunb. The legitimacy of Ueda (1986a, b) is discussed and supplementary remarks are given to support his earlier papers. The correct name of the species formerly known as *M. stellata* (Sieb. & Zucc.) Maxim., is *M. tomentosa* Thunb., and the species ever known as *M. obovata* Thunb. has the correct name as *M. hypoleuca* Sieb. & Zucc.

---

□ Cribb, P. & I. Butterfield: **The genus *Pleione*** 94 pp., 20 pls., 9 figs. 1988. The Royal Botanic Gardens, Kew. ¥ca 6,000. 本書は Kew Magazine Monograph の 1 冊で、14 の植物画のうち、ほとんどを Christabel King が描き、数点を Rodella Purves, たゞ 1 点が有名な Margaret Stones の作品となっている。園芸家向きの栽培法などについての簡素な記述のほかは、通常モノグラフの形式を採り、属記載、種と自然雑種への検索表、各種ごとの記載、異名と文献一覧、特徴などの記述がある。各種については野生品ばかりでなく、園芸品種も多数列挙されている。なお、20図版のうち、6 図版はカラー写真で、5 点は花の拡大図である。人工雑種についても網羅的に扱っている。著者のうち、Phillip Cribb は Kew の分類学者、Ian Butterfield はこの属の人工雑種などを手がけている園芸家である。この属の種の分布の中心は中国であり、広東の植物園の C. Z. Tang (唐振綱) が協力している。 (大場秀章)